

男性養護教諭に関する研究動向（第2報）

中村 千景

帝京短期大学 生活科学科

【抄録】

【問題・目的】「男性養護教諭」の現状を知るために、研究動向をまとめた前回の論文執筆から5年が経過した。この5年間で「男性養護教諭」を取り巻く現状がどのように変化したのかを、調査したいと考えた。2016年以降の男性養護教諭に関する研究を概観し、現状と課題を見出すことを本研究の目的とした。

【方法】国立国会図書館オンラインにおいて「男性養護教諭」で検索された15件の内、2016年以降の文献6件を分析対象とした。現状と課題については、文章から短い文節を抽出し質的に分析した。

【結果】全国には約4万人の養護教諭がいるが、そのほとんどが女性であり、男性は0.21%（86人）しかいない。しかし、5年前は0.12%（49人）であった男性の割合が2倍近く（1.76倍）まで増加している。文献の分析から、「専門性と性別は無関係」、「性別に関わる部分の役割分担によって、より効果的な保健室経営ができる」、「複数配置では女性男性それぞれの特性を活かすことでさらによいものになる」、「男性養護教諭が学校に入り実践が認められることで男性養護教諭に対する誤解はなくなっていく」などが挙げられた。課題としては、「長年女性が大半であった養護教諭の職に男性が入るにはハードルがある」、「男性養護教諭のロールモデルが少ない」などが挙げられた。

【考察】男性養護教諭が自身の養護実践を発信して男性養護教諭の社会的認識の変容を図るなど、当事者である男性養護教諭が行動することも大切である。「男性では養護教諭は務まらない」と言った偏見は、変えていかなければならない。男性養護教諭の正しい理解が進み、今後、性別で差別されないことを期待したい。

【キーワード】男性養護教諭，養護実践，職業選択，現状と課題

I. はじめに

帝京短期大学に勤務し始めて10年目を迎えた。また、男性養護教諭の研究を始めて9年となった。男性養護教諭の研究を始めたきっかけは、入職時に筆者自身が、養護教諭養成課程に男子学生が在籍したことに驚いた経験や、男子学生の教育実習先での学校現場の戸惑いの経験からであった¹⁾。男性養護教諭の現状を知るために、研究動向をまとめた前回の論文¹⁾執筆から5年が経過し、この5年間で「男性養護教諭」を取り巻く現状がどのように変化したのかを調査したいと考えた。

2016年以降の男性養護教諭に関する社会的認知について、出版物や新聞報道を見てみると、

出版物については、男性養護教諭自身が執筆した「男性養護教諭がいる学校²⁾」や、漫画「保健室のせんせい³⁾」、男性養護教諭友の会執筆の「男性養護教諭⁴⁾」などが出版されている。「保健室のせんせい³⁾」については、2018年7月からオンライン配信された後に単行本化し出版されていることから、年齢や性別に限定されず広く知られたのではないかと推察される。また、新聞報道については、2016年には1件、2017年には7件、2018年には4件、2019年には6件となっている⁵⁾。

これらのことを踏まえ、2016年以降の男性養護教諭に関する研究を概観し、現状と課題を見出すことを本研究の目的とした。

II. 方法

1. 男性養護教諭の配置状況調査

文部科学省による「令和元（平成31）年度学校基本調査⁶⁾」から、全国の養護教諭数を調べ、さらにその中から性別・配置された都道府県を見る。

2. 研究動向調査

国立国会図書館オンラインにおいて「男性養護教諭」で検索（2020.9.30 アクセス）された15件の内、2016年以降の文献6件を対象とした。6件の内、1件は筆者自身の論文であること、2件は書籍であったため、3件の文献を分析対象とした。現状と課題については、文章から短い文節を抽出し質的に分析する。

また、2016年以前の文献9件については、前回論文¹⁾で使用したものと合致した。

3. 倫理的配慮

今回の論文は、すでに発行された文献を使用しているため、倫理的配慮に関する事項・利益相反に該当する事項はない。

III. 結果

1. 男性養護教諭の配置状況

ここで示す養護教諭の人数は、養護教諭及び養護助教諭の本務者とする。

文部科学省による「令和元（平成31）年度学

校基本調査⁶⁾」から得られた学校（園）数と養護教諭数に対する配置率を示した（Table 1）。平成13年の教職員定数の改正⁷⁾にともない、児童数が851人以上の小学校及び生徒数が801人以上の中学校（中等教育学校の前期課程を含む）に2人の養護教諭等を配置できるよう複数配置基準が引き下げられた。また、3学級未満の小中学校（中等教育学校の前期課程を含む）と幼稚園・高等学校・特別支援学校は、養護教諭等の配置に関して法律条文に掲載されていない⁷⁾ため、学校数＝養護教諭数ではないが、幼稚園・こども園では養護教諭の配置がほとんどされておらず、中等教育学校・義務教育学校・特別支援学校では複数配置が進んでいることが分かる。また、参考までに前回（平成26年度）の配置率を併せて掲載した。

養護教諭の配置状況と、養護教諭総数に対する男性養護教諭の割合を示した（Table 2）。全国には41,187人の養護教諭がいるが、そのほとんどが女性であり、男性は0.21%（86人）しかいない。参考までに前回（平成26年度）の結果を掲載したが、5年前は0.12%（49人）であった男性の割合が2倍近く（1.76倍）まで増加していることも分かる。校種別にみると男性の割合が1%を超えているのは、こども園・通信制高校・特別支援学校となっている。中等教育学校は学校数が少ないことも影響するが、男性養護教諭は配置されていない。

令和元（平成31）年度の男性養護教諭数⁶⁾を、都道府県ごと・校種別に示した（Table 3）。網掛

Table 1. 学校数と養護教諭数に対する配置率

	幼稚園	こども園	小学校	中学校	高等学校	通信制 高校	中等教育 学校	義務教育 学校	特別支 援学校
学校数（園・校）	10,070	5,276	19,738	10,222	4,887	113	54	94	1,146
養護教諭数(人)	398	217	21,306	10,337	6,572	85	80	175	2,017
配置率（倍）	0.04	0.04	1.08	1.01	1.34	0.75	1.48	1.86	1.76
前回比較（倍）	0.03	—	1.04	1.00	1.31	—	1.51	—	1.67

Table 2. 養護教諭総数に対する男性養護教諭の割合

	幼稚園	こども園	小学校	中学校	高等学 校	通信制 高校	中等教育 学校	義務教育 学校	特別支 援学校	合計
男性養護教諭数(人)	1	3	27	14	15	1	0	1	24	86
女性養護教諭数(人)	397	214	21,279	10,323	6,557	84	80	174	1,993	41,101
養護教諭 合計(人)	398	217	21,306	10,337	6,572	85	80	175	2,017	41,187
男性の割合(%)	0.25	1.38	0.13	0.14	0.23	1.18	0.00	0.57	1.19	0.21
前回比較(%)	0.70	—	0.03	0.11	0.17	—	0.00	—	0.88	0.12

けの部分には男性の配置がない都道府県である。

都道府県ごとに見ていくと、男性養護教諭が配置されている都道府県は33ヶ所（配置率70.2%）であり、前回の27ヶ所（配置率57.4%）

と比較し、採用の広がり（岩手県・秋田県・山梨県・熊本県・佐賀県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県）がある。母数は少ないが、北海道では5年間で9倍、新潟県・島根県は4倍、大分県は

Table 3. 令和元（平成31）年度の男性養護教諭数

単位：人

	幼稚園			こども園		小学校			中学校			高等学校		義務教育学校		特別支援学校			合計	前回比較	
	国立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立	国立	公立	私立	公・私	通信	国立	公立	国立	公立	私立			
北海道							7					2								9	1
青森												1					1			2	1
岩手																		1		1	
宮城																	1			1	1
秋田							1													1	
山形																					
福島												1								1	1
茨城							2										1			3	2
栃木									1		1									2	1
群馬																					
埼玉												1								1	1
千葉									2											2	1
東京							4	1			1	1					3			10	6
神奈川											1						1			2	2
新潟							2			1		1								4	1
富山																					
石川																					
福井																					
山梨																	1			1	
長野																					
岐阜							1													1	1
静岡												1								1	3
愛知							1					1					1			3	4
三重																	2			2	2
滋賀							1			1		1					1			4	2
京都												1					1			2	1
大阪			1		1		1			1	1	1					6			12	8
兵庫										1										1	1
奈良																					
和歌山																					
鳥取							1													1	1
島根							1			1		2								4	1
岡山																					1
広島								1									3			4	2
山口										1										1	1
徳島																					
香川																					
愛媛																					
高知							1													1	1
福岡																					1
佐賀																1				1	
長崎																					
熊本					1															1	
大分							1			1		1								3	1
宮崎							1										1			2	
鹿児島					1															1	
沖縄												1								1	
合計	1			3		27			14			16		1		23			1	86	
前回比較	3			データなし		7			12			11		データなし		16				49	

3倍となっている。逆に、5年前は配置があったが、今回配置されていない岡山県と福岡県、配置人数の減少のある静岡県・愛知県については、臨時採用であったのか、どのような理由で減少しているのかが懸念されるところである。

校種別に見ていくと、校種に関係なく国立には男性養護教諭の配置はなく、公立幼稚園にも配置がない。参考までに前回（平成26年度）の結果を掲載したが、前回では、公立幼稚園に配置があったが今回は配置がなくなったこと、また、前回は私立小学校と私立特別支援学校には男性が配置されていなかったが、今回は配置が確認された。

参考までに、かつて女性の仕事と言われてきた「看護師」の男性の割合は、2016年のデータでは1,558,340人中の男性は107,470人の6.9%⁸⁾である。「保育士」の男性の割合は、2015年のデータでは1,136,000人中の男性は50,000人の4.4%⁹⁾となっている。男性養護教諭は0.21%であることから、男性養護教諭がいかに少数であるかが分かる。

2. 研究動向から見る男性養護教諭の現状と課題

国立国会図書館オンラインにおいて「男性養護教諭」で検索された15件の内、2016年以降の文献6件を示した（Table 4）。

6件の文献の内、①は筆者自身の論文¹⁾であ

り、③²⁾・⑤⁴⁾については、「はじめに」において紹介している出版物である。

②¹⁰⁾については、日本教育保健学会年次大会内での男性養護教諭主催によるフォーラムセッションの記録である。男性養護教諭の実践発表の中で、共通の特徴として「性への関わり」があるとし、男性養護教諭の性に関わる指導の実践について記述されている。

④¹¹⁾は女性大学院生による男性養護教諭4名へのインタビュー調査であり、「男性養護教諭が仕事にどのように取り組んでいるか、その意識と体験を明らかにすること」を目的としている。

⑥¹²⁾は男性養護教諭経験のある大学教員による校長5名へのインタビュー調査である。校長を調査対象にした理由は、「校長のリーダーシップが職場風土の形成に影響を与えることから、男性養護教諭への社会的障壁を取り除くには、校長の男性養護教諭に対する認識が大きな要因となると考えるため」とある。

ここでは、②¹⁰⁾・④¹¹⁾・⑥¹²⁾の文献を利用し、男性養護教諭の現状と課題を見ていく。それぞれの文献から、男性養護教諭に関わる記述を短い文節で抽出し、カテゴリーごとに整理した（Table 5）。

抽出された文節は87件あり、その内容から「社会的認識」、「困難感」、「少数派の存在」、「性指導」、「配慮」、「専門性」、「実践を発信」、「職

Table 4. 「男性養護教諭」で検索された文献一覧（2016年以降）

No.	文献タイトル	著者名	雑誌名	発行年
①	男性養護教諭に関する研究動向	中村千景	帝京短期大学紀要19,73-79	2016
②	フォーラムセッション男性養護教諭の実践から見える「教育保健」	村瀬幸浩, 小林貴義, 津馬史壮 他	日本教育保健学会年報(23),117-121	2016
③	男性養護教諭がいる学校: ひらかれた保健室をめざして	川又俊則, 市川恭平	かもがわ出版	2016
④	男性養護教諭の仕事に対する意識と体験に関する質的研究	鈴木春花, 朝倉隆司	日本健康相談活動学会誌 13(1)29-40	2018
⑤	男性養護教諭	男性養護教諭友の会	東山書房	2019
⑥	男性養護教諭の養護実践に対する校長の認識	妻鹿智晃, 砂村京子	学校救急看護研究13(1)21-34	2020

Table 5. 文献からの抽出内容

カテゴリー	記述内容	文献
	男性養護教諭を不安視する現状がある	④
社会的認識	採用に関して、女子児童生徒への対応が困難と考え男性養護教諭に対して否定的な意見を持つ現職養護教諭がいること	④
	男性養護教諭の採用に制約のある教育委員会があることが明らかになっていること	④
	男性養護教諭に対して世間は女子児童生徒への対応と言う点を問題視している	⑥
	長年女性が大半であった養護教諭の職に男性が入るにはハードルがある	⑥
困難感	女子児童生徒への応急処置・健康診断等で専門性を発揮できないと指摘される	②
	男性の性としての職務上の壁を感じながら実践している	②
	男性の目線に立って子どもの育ちをつぶさに見ることで男性養護教諭独自の問題意識を募らせている	②
	男子児童生徒への性教育については同じ性ということで危機感を認識している	②
	前任の女性養護教諭と比較され、負からのスタートを切る	②
	男性では養護教諭はできないのかと自問自答する日々	②
	女子児童生徒が男性養護教諭に対して感じている羞恥心は強いと認識	④
	保健室に男性養護教諭しかいなかった場合、女子児童生徒は相談したくてもできないと気にかかる	④
	接し方によってはセクハラと捉えられてしまう危険性を感じている	④
定期的に異動があり、男性養護教諭は新しい学校で自分の存在を認めてもらう努力が必要	④	
少数派の存在	ケア労働において男性であることがポジティブに働き、男性はマイノリティであるがゆえに特有の気づきや経験を蓄積しながら成長過程を辿る可能性がある(男性養護教諭も同様)	④
	男性養護教諭が勤務したことのない学校では、男性養護教諭に対する不安や疑問があると認識	④
	採用自治体で男性養護教諭が自分だけの場合、孤独感を抱く	④
	男性養護教諭という希少な存在のために、女性養護教諭から注目され温かく見守られた	④
	男性養護教諭のロールモデルが少なく、中年期を迎えた時の男性養護教諭の姿をイメージできない	④
	少数派は差別を受けやすい存在	④
性指導	男性養護教諭は現場で性に関わる課題と直面している	②
	男性養護教諭の性への関わりは必然的	②
	4年生は学習指導要領にもあるように二次性徴について理解するよい機会である	②
	自分の体や心の変容を肯定的に捉え、個人を尊重し両性を平等に扱うことの指導	②
配慮	保健室利用の際に、思春期の女児が「触られること」を気にする	②
	年度初めの身体計測の時、気軽に保健室を利用してねと伝える	②
	女児に触れないよう、付き添い児童にお手伝いをお願いすることもある	②
	高学年女子児童への対応が難しい部分があることを考慮し、負傷部位に応じて対応に配慮している	⑥
専門性	ほげんだよりを工夫したことで、保護者と子どもの信頼を積み上げた(信頼を紡ぐ味方)	②
	誤解を未然に防ぐために子どもとの信頼関係の構築を意識的に行う	④
	養護教諭は学校唯一の専門職という立場のため、働く際に少数派男性とであることが意識されにくい	④
	男子校や特別支援学校では男性養護教諭のニーズがある	④
	学校にとって男性養護教諭が普通と捉えられれば一人でもやっていける	④
	生徒が男性養護教諭と出会い関わることを通して、性別によらない養護教諭としての専門性や人間性を受け入れ、不安が解消される	④
	男性養護教諭と実際に関わることで、抱いていた偏見や不安が取り除かれた	④
	男性でも養護教諭の職務内容や専門性という点ではクリアできる	⑥
校長は男性養護教諭の得意分野が何なのかという点を重視する	⑥	
実践を発信	子どもたち一人ひとりの頑張る姿や笑顔をほげんだよりで発信することで、保護者に信頼が伝わる	②
	ほげんだよりの感想を保護者からいただいたり雑談することで、子どもも保護者も親近感を持ってくれた	②
	広報ツールを利用し、日ごろの保健室経営や、養護教諭自身を知ってもらう機会となる	②
	男性養護教諭という存在を認めてもらうために、仕事に真摯に取り組み問題なく働けると証明していく	④
	男性養護教諭が学校に入り実践が認められることで男性養護教諭に対する誤解はなくなっていく	⑥
	教職員が男性養護教諭の実践を見ることで正しい理解者や支援者になっている	⑥
男性養護教諭と共に勤務することや保護者として関わることで誤解が解けることが多い	⑥	
職業選択	男子児童が自分自身の働く姿を見て、養護教諭を目指すかもしれない	②
	男性養護教諭が働いていることで、子どもの職業選択の幅を広げる可能性がある	④

複数配置	両性の養護教諭が性に関する指導に関わることは、二次性徴や性差といった2つの性について理解を深める手立てとなる	②
	男性だから女性養護教諭や女性教諭に助けを求めないと働けないのではなく、一人の養護教諭として周囲との連携は不可欠でチームプレーを重視して支援する姿勢をとることでうまく働ける	④
	女性養護教諭や女性教諭と協力することで、男性養護教諭は問題なく仕事ができる	④
	相方の女性養護教諭は悩みや不安を相談でき、対等な立場で議論ができる仕事上の良きパートナー	④
	保健室に男女の養護教諭が配置されていることで、子どもは自分の悩みにあわせて養護教諭を選ぶことができる	④
	男性と女性とでは物事の見方や考え方が異なる場合もあるため、視点の違いは子どもを多角的に見ることに繋がる	④
	性的に難しい対応でも男女の養護教諭が協力しながら行え、幅広い健康課題に応えられる利点がある	④
	子どもが相談しづらい性に関する相談を同性の養護教諭なら話しやすい	⑥
	女性と男性の養護教諭がいることで子ども自身が話しやすい養護教諭を選択できる	⑥
性別は無関係	体や性に関する指導で男子児童生徒に男性養護教諭が話すことで子どもが共感的に理解できることや、兄のような存在となり生徒指導上困難を抱える男子児童生徒たちに対応できる	⑥
	性別に関わる部分の役割分担によってより効果的な保健室経営ができるなど、複数配置では女性男性それぞれの特性を活かすことでさらによいものになる	⑥
	養護教諭として信頼関係を築く上で、男性ということは大きな問題ではない	②
	専門性と性別は無関係であり、性別によって適性が判断されることに異議を唱えている	④
	女子児童生徒に対応を拒否された、男性養護教諭について否定的な意見を言われたような体験はない	④
	養護教諭の仕事は看護師のように相手に強い羞恥心が伴う関りはほとんどなく、保育士のように母性と結びつきやすい仕事内容ではない	④
	男性が行くと児童が不安になることは、周りの教職員に理解し協力してもらうことで信頼へと繋がった	②
	内科健診では、女性教員に記録してもらう	②
	高学年女子児童への身体接触は男性養護教諭の助言のもと女性教員が対応するなど協働体制を作ることが大事である	⑥
校内体制	他の教職員や外部専門家と組織的対応をすることで男性養護教諭の単数配置でも可能である	⑥
	男性養護教諭を理解してもらうための手配を校長として意識して行うなど、男性養護教諭の養護教諭間での位置づけや学校内での位置づけを配慮した経営を行うことで男性養護教諭の働く環境を整備	⑥
	子どもの育ちにとって望ましい教育とはどのようなものであるか	②
	学校や家庭で行われてきた性教育は女性の性に関わる内容が中心である	②
	男児は自らの男性の性を理解し自尊感情を高めるような性教育を受けることがない(偏りのある性感)	②
	男児の3割は自己の性に対してネガティブな印象を持っている	②
	男性には「性加害者」のイメージが与えられ被害を受けることはない「思い込み・偏見」を抱かれる	②
	大人の性犯罪の加害者の2～3割は子どもの頃被害を受けた経験がある	②
	相互的・社会的な性感をこれからの男性が育むことができるようサポートしていく必要性	②
性指導の課題	男児が自己の性を相互的・社会的に捉え、肯定的な捉えとなった時、女兒の性への理解も深まる	②
	4年生女兒が「自分が女性だから宿泊学習の引率は女性養護教諭がよい」と訴えてきた(学習のきっかけ)	②
	女子児童生徒と男性養護教諭の間だけでなく、男子児童生徒と女性養護教諭の間にも羞恥心やセクハラの問題が考えられる	④
	養護教諭の性別及び子どもの性別に関係なく、対人職の倫理的配慮として適切な言葉掛けや同性教職員による子どもへの対応が必要	④
	男性の養護教諭と男児との同性の関係性への期待	②
	男児が自らの性を肯定的に捉えるようになることは異性を含めた他者への理解を深めることに繋がる	②
	男児の未来を見つめ性を育てていく性教育の実践がこれから一層強く求められる	②
	男性養護教諭としての経験を活かして管理職になり問題意識を持って学校組織により影響を与える	⑥
	管理職になり男性養護教諭をアピールする	⑥
今後の期待	関係者に養護教諭の職務内容が多岐に渡っていることを気づかせるなど、男性養護教諭が養護教諭の職を見直す存在になる	⑥
	思春期の男子児童生徒やその保護者へ相談的に関ることや、LGBTの児童生徒の相談窓口になるなど、養護教諭の性別を付加価値として活用できる場面において子どもたちのニーズに応じることができることを期待	⑥
	壁があっても男性養護教諭として働きたい気持ちを大事にすることや少数派としての努力を重ねることでマイノリティの壁を越えることができることを期待	⑥
	男性養護教諭が自身の養護実践を発信して、男性養護教諭の社会的認識の変容を図るなど、当事者である男性養護教諭が社会的認識を変えるために行動することを期待	⑥

業選択」,「複数配置」,「性別は無関係」,「校内体制」,「性指導の課題」,「課題」,「今後の期待」の14カテゴリーに分類した。

妻鹿・砂村¹²⁾は、これまでの男性養護教諭に関する先行研究を概観し、次の3点に見解を集約している。第一に「異性の養護教諭を複数配置することによって、児童生徒のニーズに合った対応が提供され教育効果が高まる」、第二に「養護教諭が行う養護実践に性による違いはなく、女性であれ男性であれ学校保健活動を推進し、養護をつかさどることに変わりはない」、第三に「男性養護教諭に対する社会的障壁は、男性養護教諭と接することによって取り除かれる可能性がある」。さらに、「女性養護教諭の補完的な存在として男性養護教諭を位置付けるのではなく、男性養護教諭が行う養護実践そのものが評価され、男性養護教諭の存在意義が示される必要がある。¹²⁾」とも述べている。

参考までに、研究動向調査の際に「男子養護教諭」で検索をしたところ、32年前に発表された論文「養護教諭の複数配置と男子養護教諭の採用についての現職養護教諭の意識について¹³⁾」を目にすることができた。養護教諭の複数配置については、32年前に「複数配置問題」として提起されており、さらに男子養護教諭（男性養護教諭ではなく文献に従った記述とした）についても「最近全国的におこっている男子養護教諭の採用問題¹³⁾」と記述されている。その当時、全国調査として行われた「複数配置を望む現職養護教諭は97.1%¹³⁾」とある。「男子養護教諭の採用」については片岡¹³⁾の北海道現職養護教諭1,000人対象の調査で、「採用すべきである(39.0%)」、「すべきでない(13.2%)」、「考えてみたことがないので分からない(46.8%)」とある。「分からない」が多数であったことは、「身近な問題とはなっていないように思われる¹³⁾」とし、「男子の志願者は全国的に増えており採用に踏み切らざるを得ないであろう」と片岡¹³⁾は述べている。この当時すでに、「養護教諭は女性特有の職業であり男子には適性はない」と記述されている中で、「本来職業には男女差はなく自由である」、「一般教師の養護教諭や学校保健の認識を向上させる」、「自分自身の資質向上に役立つ」、「男子生徒のため」、「複数配置で男子を採用するとよい」といった記述が見られた¹³⁾。男性養護教諭の現状として、32年経過した現在と同様で

あることが分かる。

IV. 考察

養護教諭の配置状況から、5年前は0.12% (49人)であった男性の割合が、今回は0.21% (86人)と5年間で2倍近く(1.76倍)まで増加し、都道府県ごとに見た配置状況では、5年前の27ヶ所(配置率57.4%)から33ヶ所(配置率70.2%)へと広がりが見られた。

しかし、3件の文献を分析した結果、「社会的認識」にあるように、不安視や否定的な意見、採用に制約がある教育委員会があることが挙げられ、「困難感」や「少数派の存在」のように、理解されていない様子も見られた。

男性養護教諭は、そのような理解されない状況がある中、「配慮」や「校内体制」を利用した保健室経営を行っている。具体的には「複数配置」を上手に活かし性別に関わる部分の役割分担によって、より効果的な保健室経営を行うこと、女性男性それぞれの特性を活かす実践を行っていた。また、「専門性」として「性別は無関係」であることも挙げられていた。そして、「実践を発信」にあるように、男性養護教諭が学校に入り実践が認められることで男性養護教諭に対する誤解はなくなっていくことや、「今後の期待」にあるように男性養護教諭が自身の養護実践を発信して男性養護教諭の社会的認識の変容を図るなど、当事者である男性養護教諭が行動することも大切であると感じた。

課題としては、長年女性が大半であった養護教諭の職に男性が入るにはハードルがある、男性養護教諭のロールモデルが少ない、などが挙げられた。男性養護教諭と実際に会うことで、理解が進み、さらには男子児童生徒の職業選択として有効であるのではないかと考える。

10月の終わりに、高校2年生の男子生徒が「養護教諭になりたいので入学について相談したい」と筆者を訪ねて来た。母親と一緒に来校いただき、1時間程度色々な話をさせていただいた。その男子生徒は夏に熱中症になり、養護教諭の対応に感動し、こんな素敵な仕事があるのだと感じたのだと言う。対応した養護教諭は女性であったが、男性でも養護教諭になれると知り目指したいと考えるようになったとのことである。しかしながら、実際に仕事に就いている

男性は多くないことも知って相談に来たとのことであった。男性養護教諭の現状を伝え、まだまだ偏見があることも伝えたが、男子生徒の居住地と同じ都道府県にも男性養護教諭が採用されていることを伝えると嬉しそうであった。

このような未来の男性養護教諭になるかもしれない若く熱意ある生徒に会うと、今のような「男性では養護教諭は務まらない」と言った偏見は、なんとしても変えていかなければならないと感じる。本人の努力が報われないような現状を払拭するため、さらに研究を進め、32年前も同様の現状があったことも頭に置いて、正しい理解が進むよう努力していきたい。また、書評¹⁴⁾にも書いたが「男性養護教諭の正しい理解が進むこと、性別で差別されないこと、そしていつか、男性養護教諭から男性が取れ、養護教諭とあたりまえに呼ばれる未来を期待したい」と切に願う。

【謝辞】

本研究を実施するにあたりご支援ご協力いただきました、市川恭平先生、津馬史壮先生をはじめ男性養護教諭友の会の先生方、吉田聡先生、飯野崇先生、妻鹿智晃先生をはじめ男性養護教諭友の会関東支部の先生方、東山書房の山本敬一氏に、深く感謝いたします。

【文献】

- 1) 中村千景 (2016) 男性養護教諭に関する研究動向 帝京短期大学紀要, (19), 73-79
- 2) 市川恭平・川又俊則 (2016) 男性養護教諭がいる学校 かもがわ出版
- 3) 水島ライカ (2019) 保健室のせんせい。 KADOKAWA BRIDGE COMICS
- 4) 男性養護教諭友の会 (2019) 男性養護教諭 東山書房
- 5) 前掲4) pp108-109
- 6) 文部科学省 (2019) 学校基本調査令和元年度 (20191225 公開) e-Stat 政府統計の総合窓口 <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400001&tstat=000001011528> (2020年10月2日)
- 7) 必携学校小六法 (2011) 公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律 第8条第2項 協同出版 p105
- 8) 日本看護協会出版会 平成29年看護関係統計

資料集

<https://www.nurse.or.jp/home/statistics/index.html>

「就業者数 (4) 看護師・准看護師」

<https://www.nurse.or.jp/home/statistics/pdf/toukei04.pdf>

「就業者数 (5) 保健師・看護師・准看護師 (男性)」

<https://www.nurse.or.jp/home/statistics/pdf/toukei05.pdf>

(2020年10月12日)

- 9) 厚生労働省「保育士等に関する関係資料」第3回保育士等確保対策検討会 平成27年12月4日参考資料1

https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/s.1_3.pdf

(2020年10月12日)

- 10) 村瀬幸浩・小林貴義・津馬史壮 他 (2016) フォーラムセッション男性養護教諭の実践から見える「教育保健」(第12回日本教育保健学会) 日本教育保健学会年報, (23), 117-121
- 11) 鈴木春花・朝倉隆司 (2018) 男性養護教諭の仕事に対する意識と体験に関する質的研究 日本健康相談活動学会誌, 13 (1), 29-40
- 12) 妻鹿智晃・砂村京子 (2020) 男性養護教諭の養護実践に対する校長の認識 学校救急看護研究, 13 (1), 21-34
- 13) 片岡繁雄 (1982) 養護教諭の複数配置と男子養護教諭の採用についての現職養護教諭の意識について 学校保健研究, 24 (1), 37-43
- 14) 前掲4) pp146-147

A Review of Research on the male Yogo teacher(second report)

Chikage NAKAMURA

Department of Living Science, Teikyo Junior College

【abstract】

【Purpose】 Five years have passed since I last wrote a review on the research trends of “male Yogo teachers” to understand their current status. I wanted to investigate how their current status has changed over the last five years. This study aimed to overview research on male Yogo teachers since 2016, explore their current status, and identify issues.

【Methods】 Of 15 results found for “male Yogo teachers” through a National Dietary Library online search, six articles published since 2016 were analyzed. The current status and issues were qualitatively analyzed by extracting short passages from the texts.

【Results】 There are approximately 40,000 Yogo teachers across Japan. Most are women; only 0.21% (86) are men. However, this represents a nearly two-fold increase (1.76 times) from 0.12% (49) 5 years ago. Our literature analysis shows that “one’s specialty is unrelated to one’s gender,” “the division of gender-related roles allows for more effective management of the school infirmary,” “the assignment of male or female teachers can improve the situation by utilizing their gender characteristics,” and “misunderstandings of male Yogo teachers will disappear once they are assigned to schools and their practical skills are acknowledged.” Some raised issues include: “Men face a hurdle in serving in the Yogo teacher’s role, which has predominantly long been served by women”; “Social perceptions about male Yogo teachers prevent them from practicing as school nurses”; “There are not many role models for male Yogo teachers”; and “Being a male Yogo teacher needs to be a career choice.”

【Discussion/Conclusion】 Male Yogo teachers should take the initiative in disseminating information on their own nursing practices and trying to change social perceptions. The prejudice that “males cannot serve as Yogo teachers” must be changed. Hopefully, people will gain a proper understanding of male Yogo teachers so they will not be discriminated against based on gender.

【Key words】 male Yogo teacher, Yogo practice, Occupation selection, Current status and issues